先端教育研究実践センター年報, 2023, 23, 1-11 論文｜プロジェクト研究（企画）

2022年度東北大学教育学部新カリキュラムに関する報告（第1報）
― 1年次学部専門科目の履修とコース決定を終えて ―

神谷 哲司・後藤 武俊・佐藤 克美・小嶋 秀樹・野口 和人
東北大学大学院教育学研究科

要約

令和4年度入学生から始まった，新たな学部専門教育課程のありかたについて，1年次終わり時点での振り返りとして，オンライン・アンケート調査を実施し，今後の教育体制のありかたについて示唆を得ることを目的とした。2023年2月17日から24日までの間実施されたオンライン調査で62名（回収率82.7%）から回答が得られた。結果として，1年次終わりのコース選びに際して，新設・一新された「教育学への招待」「教育学研究入門」が一定程度の効果を持ちえた可能性が示唆されるとともに，今後の両講義のありかたについて検討すべき点が示された。また，卒業後の進路の検討先として，「東北大学への大学院進学」も27名おり，今後の動向を見守る必要が指摘された。コロナ禍での学びについては，対面授業の割合も多く，コロナ禍においても全体的には充実した学生生活を送っている姿も偲ばれていた。

キーワード；カリキュラム，コース。教育学，専門科目，学部教育

【研究の背景と目的】

かねてより懸案となっていた本学教育学部の学部専門課程のカリキュラム改革であったが，令和4年度入学者からの全学教育科目の新カリキュラムに歩調を合わせる形で検討が進められ，同年の入学者より新たなカリキュラムによる教育課程が始められることになった。そのため，2021年度に学部カリキュラム改革ワーキング・グループ（以下，WG）が編成され，2018年度に組織されていたWGの課題を継承しつつ，検討課題を整理し，新カリキュラムの構築が進められた。その経緯は，WGの報告書（学部カリキュラム改革ワーキング・グループ，2021）に詳しいが，主な論点は1）学部教育におけるコース・指導体制のあり方，2）学部共通科目（必修科目）のあり方であり，その2点を踏まえて，3）学部専門科目の履修の流れを整えることであった。

WGでの検討の結果，コース・指導体制のあり方については，教育学コース・教育心理学コースの2コース体制を維持すること，さらに，コースの決定，所属時期を旧カリキュラムの3セメ開始時（2年次10月）から，2セメ開始時（2年次4月）に繰り上げること，指導教員の決定，研究室配属の時期も旧カリキュラムの3年次7月から，3年次4月（3月中旬の教授会にて決定）に繰り上げることとなった。

また，コース決定の前倒しに関わり，コースを決めるために必要な情報を学生が入手し，広く教育学についての基礎的な知識を習得している必要があることから，学部共通科目として，旧カリキュラムの2セメの「教育学研究入門」を全教員の研究紹介を主たる目的とする講義に変更するとともに，新たに1セメに教育学部での学びを展望する「教育学への招待」を開設し，入学当初の教育学への学びのモチベーション低下の予防を図ることとした。さらには，教育学部内での学生同士の学年を超えた縦のつながりを形成し，学部での学びの見通しを持てるようにすることを目的とし，両科目にティーチング・アシスタント（TA），およびベーシック・ティーチング・アシスタント（BTA）を配置した。加えて，上記3）の履修の流れの整理として，学部専門科目，講義科目，演習科目の前倒しについても検討を行ったが，もとより1年次には全学科目の履修科目が詰まっていることから，大幅な前倒しは叶わず，結果としては，7つの授業科目が前倒して開講され，1つの演習科目が6セメに後ろ倒しになることで，カリキュラムの流れが整理された。

さらに，これらのカリキュラム改革のねらいの根底には，大学院への内部進学者が減少しているとの認識があり，学部から大学院への接続をいかに構築するかという問題意識も共有されていた。

このように，新カリキュラム改革は，1年次の履修に関してみると，「教育学への招待」（1セメ）の新設と「教育学研究入門」（2セメ）の改革，ならびに，1年次終わりにコース決定を行うといった点が大きな変更点であった。そこで，本報告ではまず1年次の終わりにおいて，2022年入学者に1年間を振り返ってもらい，新カリキュラムにおける変更点についての学生の意識を確認するとともに，2年次以降の指導に資する情報を得ることを目的としたアンケートを行い，その報告を行うものとする。

【方法】

1年次のカリキュラムを終えた時点において，学部1年生を対象にアンケート調査を行った。また，そのアンケート調査で希望者を募り，学生懇談会を開催し，インタヴュー調査による聞き取りも行うこととしたが，本報では前者のアンケート調査の結果について報告する。

アンケートはGoogle Formsで作成され，フォームの1ページ目に調査の趣旨と協力依頼が説明されるとともに，協力は任意であること，入力にあたってはメールアドレスが収集されること，そのメールアドレスは追跡調査のデータ連結のためだけに使用され，分析担当者以外は目にしないこと，分析にあたってはメールアドレスが削除されたものを分析に使用し，統計的に処理するとともに，自由記述欄のコメントも誰のものかわからないものとして処理すること，などが明記された。

調査時期は，2023年2中旬から下旬。具体的には2月17日に学生にアンケート協力依頼のメールを一斉に配信するとともに，学部の掲示版やSNSで協力を呼び掛け，3度に

わたるリマインダメールを送信し，同月24日19時に協力を締め切った。締め切り時点で58名の協力が得られていたが，その後，27日深夜までに4名のさらなる協力が得られたため，それらをすべて分析対象とした。調査対象となった学部1年生の在籍人数は75名であり，そのうち62名から協力が得られたこととなる（回収率82.7%）。

具体的な調査項目は以下の通り。フォームは全体で4つのセクションに分割され，§1：コース・指導体制や進路についての意識，大学生活の全般的な満足度，§2，3：「教育学への招待」「教育学研究入門」についての満足度，積極度，達成度，§4：学生懇談会への参加希望とコロナ禍における学生生活等についての意識を尋ねることとした。

§1では，2月21日に締切となっていた所属コース希望の本調査で希望したコースを「教育学コース」「教育心理学コース」「まだ決めていない／悩んでいて提出していない」の3つの選択肢を準備して尋ねた（Q1-1）。3つ目の選択肢はコース希望調査（本調査）の締切前に本アンケートに協力するケースがあることから念のため設置した。あわせて，希望するコースの決定経緯についても尋ねた（Q1-2）。さらに，現時点での指導教員決定にかかる意識を尋ねるために「二年生の秋からの指導教員決定について考えた時，今あなたはどのような気持ちですか。」（Q1-3）と現時点での感情価を尋ねた。感情価の測定については，一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）の24項目のうち，3つの下位尺度（肯定的感情，否定的感情，安静状態）からそれぞれこの教示文に即していると判断された項目を4項目ずつ作用し，12項目尋ねた。選択肢は，追跡調査において細かな変化も拾えるようにするために，「非常にあてはまる（6）」から「ほとんどあてはまらない（1）」までの6件法とした。加えて，指導教員の決定を控えてこれからの学びにおいて選択を迫られる場面（専門・進路決定場面）においてどれくらい自信があるかについて尋ねることとした（Q1-4）。具体的には，「受講したい授業」「学びたい専門分野」「卒業研究のテーマ」「指導してほしい先生」「卒業後の進路」の5項目について，「決める自信がある（5）」から「決める自信がない（1）」までの5件法で尋ねた。そして，「コース決定や指導教員決定について，現時点で思うところ，考えるところ」について自由に記述してもらうとともに（Q1-5），「卒業後の進路について現時点で検討しているもの」（Q1-6）を複数回答でチェックしてもらった。選択肢は「東北大学の大学院進学」「東北大学以外の大学院進学」「国家公務員・地方公務員」「中学・高校の教諭」「民間企業就職」「まだ決まっていない」「まだ考えられない」「その他」の8項目であった。なお，「まだ決まっていない」と「まだ考えられない」については，進路未決定者については，進路を決めるための情報が不十分であるために決められないundecided型と，気質的に不安傾向が高いために慢性的に未決定状態になるindecisive型に分かれるという知見（若松，2001）に対応させた。また，東北大学での学生生活全体についての満足度（Q1-7）も，「大変満足している（5）」から「まったく満足していない（1）」の5件法で尋ねた。

§2では，「教育学への招待」について，§3では，「教育学研究入門」について，満足度

（Q2-1,3-1），授業参加への積極度（Q2-2,3-2），授業の目的の達成度（Q2-3,3-3）をそれぞれ 5 件法で尋ねた。達成度の質問においては，補足説明として，それぞれの授業のシラバスに記載されていた授業の目的を要約して表示した。

§4 では，懇談会の参加希望とその日程（Q4）について尋ねるとともに（本報告では割愛），令和 4 年度は COVID-19 の影響でまだオンライン授業がなされていたこともあることから，受講した対面授業の割合を 10%刻みで 0%から 100%から選んでもらった（Q5）。また，学生自身の授業形態（対面授業とオンライン授業）の選好性（Q6）を 5 件法で尋ねた。この Q5,6 は，本研究科におけるオンライン教育に関する調査結果（小嶋ほか，2022）と同じ設問を用いた（ただし，Q5 は自由記述であったものを 11 件法に改めている）。最後に，COVID-19 の感染状況の中で高校を卒業し，1 年間の学生生活を送っていることについての自由記述(Q7)ならびに，本学の教育研究あるいは本アンケートへの意見を自由記述で回答してもらった（Q8）。

【結果と考察】

Q1_1 希望するコースについては，コース希望の本調査提出日が，このアンケートの締め切り日よりも早いこともあり（また，本調査締め切り後には，全員の提出を確認して「まだ決めていない／悩んでいて提出していない」の選択肢を選べないように設定を変更した），協力者全員がいずれかのコースを選択していた。結果，教育学コースは 26 名，教育心理学コースは 36 名であった。

コース希望調査の本調査の結果は教育学コース 34 名，教育心理学コース 41 名であったので，協力者のコースの偏りはないもの（$\chi^2(1)= 0.10$, *n.s.*）と判断された。

Q1_2 の希望するコースの決定経緯について，Q1_1 の希望コースとのクロス表を Table1 に示す。基本的には，入学前から希望していたコースを志願した学生が 33 名（53.2%）と協力者の半数以上が入学前からの希望コースを選んでいたことがうかがえるが，入学前から再考することなくコースを決定したのは 15 名（24.2%）で，全体の 1/4 程度であった。また，それ以外の選択肢は，「入学前に希望は決まっていたが，考えたうえで最初とは別のコースを希望した。」が 8 名（12.9%），「入学前に希望は特になかったが，入学後に考えた上で迷いなく希望コースを決めた」も 8 名（12.9%），「入学前に希望は特になく，入学後も考えてとりあえず決めたが，正直まだ迷っている。」が 10 名（16.1%），「入学前に希望は特になく，入学後もあまり考えていなかったが，なんとなく決めた。」が 2 名（3.2%）であった。概して，コース選びについていろいろ検討した学生が多いことがうかがえる。

Q1_3 の感情価の測定については，4 項目ずつの 3 下位尺度それぞれの内的整合性が，肯定的感情 α=.81，否定的感情 α=.80，安静状態 α=.88 と十分な値であったのでその算術平均値を算出し，Range1-6 の中間値 3.5 を検定値とした 1 サンプルの *t* 検定を行った結果を Table2 に示す。肯定的感情と否定的感情がともに検定値よりも有意に高いことが示され（肯定的感

情 t（57）=5.60, p<.001 d=0.74，否定的感情 t（57）=3.83, p<.001 d=0.50），指導教員決定について，現時点ではアンビヴァレントな感情価にあることが示されていた（Table2）。

Table1 本調査希望コースとコース選考過程

	教育学	教育心理学
入学前から希望は決まっており，そのまま再考することなくそのコースを希望した。	3	12
入学前に希望は決まっていたが，いろいろ考えたうえで最初と同じコースを希望した。	7	11
入学前に希望は決まっていたが，考えたうえで最初とは別のコースを希望した。	3	5
入学前に希望は特になかったが，入学後に考えた上で迷いなく希望コースを決めた	6	3
入学前に希望は特になく，入学後も考えてとりあえず決めたが，正直まだ迷っている。	6	4
入学前に希望は特になく，入学後もあまり考えていなかったが，なんとなく決めた。	1	1
合計	26	36

Table2 指導教員決定について考えた際の感情

	平均値	SD	t 値[1]		d
Q1_3PA（肯定的感情）	4.10	0.83	5.74	***	0.73
Q1_3NA（否定的感情）	3.98	0.90	4.17	***	0.53
Q1_3CA（安静状態）	3.40	0.96	-0.82	n.s.	-0.11

[1] 検定値3.5　　df=61　　N=62

Q1_4 の専門・進路決定場面における自信について度数分布を Table3 に示す。概して，「受講したい授業」や「学びたい専門分野」は「自信がある」(「どちらかといえば」含む）の割合は順に 47 名（75.8%），48 名（77.4%）であり，自信がある傾向にあるが，「卒業研究のテーマ」は 27 名（46.8%），「指導してほしい先生」は 32 名（51.6%）と半数程度にとどまり，「卒業後の進路」では，21 名（33.9%）であった。

Q1_5 の「コース決定や指導教員決定について，現時点で思うところ」については，具体的な記述をした回答が 14 名あった。全体の記述を概観し，回答カテゴリを生成したところ（複数カテゴリ化），「指導教員が決められるか不安」2 名，「希望する先生につけるか不安」2 名，「希望するコースが自分に合っているか不安」2 名，「決めたコースでよいの

か不安・心配」4名,「希望したコースへの決意表明」2名,「コース決定・指導教員決定に学業成績が用いられることの不安・後悔」2名,「コース決定・指導教員決定への意思表明」3名,「教員の情報希求」1名であった。

Table3 専門・進路決定場面における自信

	決める自信がある	どちらかといえば決める自信がある	自信があるともないともどちらとも言えない	どちらかといえば決める自信がない	決める自信がない
受講したい授業	19	28	10	4	1
学びたい専門分野	21	27	7	7	0
卒業研究のテーマ	11	18	16	13	4
指導してほしい先生	11	21	14	13	3
卒業後の進路	9	12	22	11	8

Q1_6の「卒業後の進路として検討していること」では,民間企業就職が32名(51.6%)で最も多く,次いで東北大学への大学院進学が27名(43.5%),国家公務員・地方公務員が25名(40.3%)であり,東北大学以外への大学院進学も17名(27.4%),中学・高校の教諭13名(21.0%)であった。また,「まだ決まっていない」14名(22.6%),「まだ考えられない」4名(6.5%)も見られていた。また,「その他」は2名おり,それぞれ「起業、映像系」,「将来的に2種免許を取得し,小学校の教員」であった。なお,複数回答の総計は134であった。これは,回答者数で除すると1名あたり2.16であり,1名あたり平均2つ強の選択肢を選択していたこととなり,まだまだ進路を十分に絞り込める段階にはないことがわかる(Figure1)。

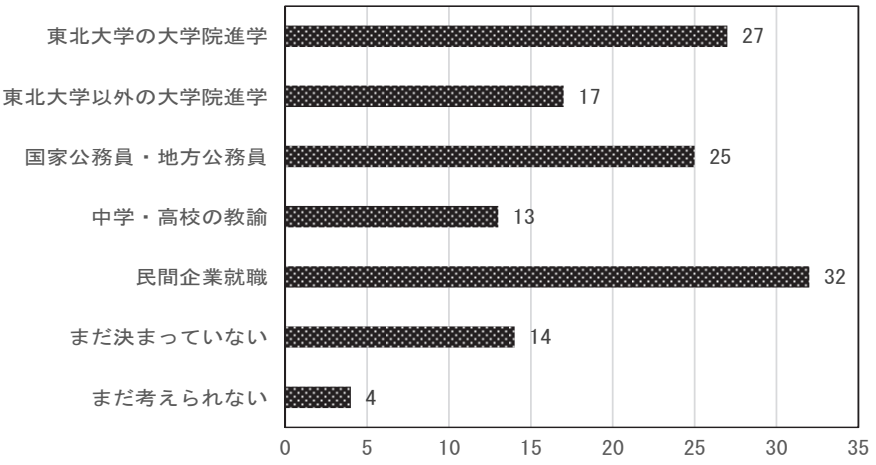

Figure1 卒業後の進路として検討していること

Q1_7 の大学生活の全体的な満足度については，「大変満足している」（5）から「まったく満足していない」（1）までのリッカート式（中間項の選択肢に表記なし）であったが，「5(大変満足している)」10 名（16.1%），「4」が 40 名（64.5%）であり，概ね満足している傾向であったが，「2」が 3 名（4.8%），「1（まったく満足していない）」が 1 名（1.6%）おり，満足していない学生も散見されていた（Figure2）。

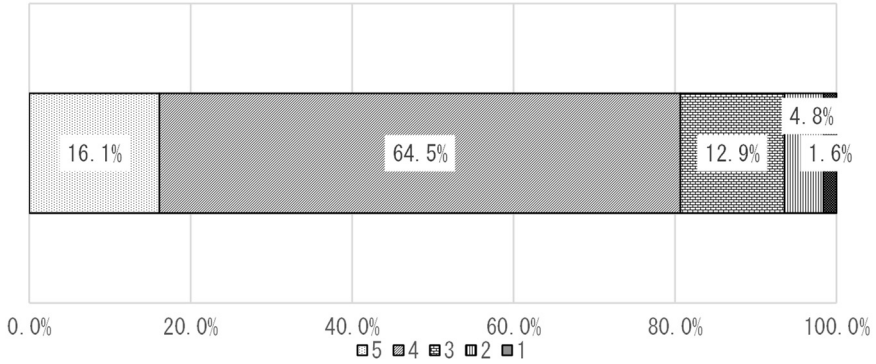

Figure2　学生生活の全体的な満足度

§2，3 における「教育学への招待」ならびに「教育学研究入門」の満足度，積極度，達成度について Figure3 に示す。「教育学への招待」ではすべて，ポジティヴ傾向を示す「5 大変（満足／積極的），大いに達成」あるいは「4」と回答したものが 70%前後であったが，「教育学研究入門」では，特に積極度と満足度が 60%弱とやや低めであった。片や，「教育学研究入門」の達成度は 46 名（74.2%）が達成した方向に認識しており，最も高い結果であった。また，これら 6 項目の単純相関係数を見てみると，いずれも中程度から高い値を示していたが，中でも「教育学への招待」の積極度と「教育学研究入門」の積極度が r=.70（p < .001）と高い点が目を引いている（Table4）。

§4 のＱ５の対面授業の割合は，10%刻みで尋ねたところ 80%と 70%がともに 17 名（27.4%），90%が 9 名（14.5%）と 70%超の学生が対面授業で受講していることが示されていた。一方，対面割合が 50%に満たないものも 9 名（14.5%）おり，ハイフレックスなどでオンライン授業を選択している学生も見受けられている（Figure4）。対面授業とオンライン授業との好み（Q6）については，「オンライン授業を好む」7 名（11.3%），「どちらかといえばオンライン授業を好む」6 名（9.7%），「好みに差はない」18 名（29.0%），「どちらかといえば対面授業を好む」21 名（33.9%），「対面授業を好む」10 名（16.1%）と全体的には対面授業を好む傾向がみられたが，オンライン授業を嗜好する学生も確認された。さらに，「どちらかといえば」をその授業を「好む」としたものを合わせて 3 段階とし，Q5 の対面授業の割合を 3 分割したものとのクロス表を作成したところ（Table5），好みと

対面授業の割合との間に有意な関連は認められなかった（$\chi^2(4)= 7.77$, *n.s.*）。対面授業については，学生の嗜好性によって選択されているのではなく，コロナ禍をはじめとした諸事情で規定されている可能性がうかがえた。

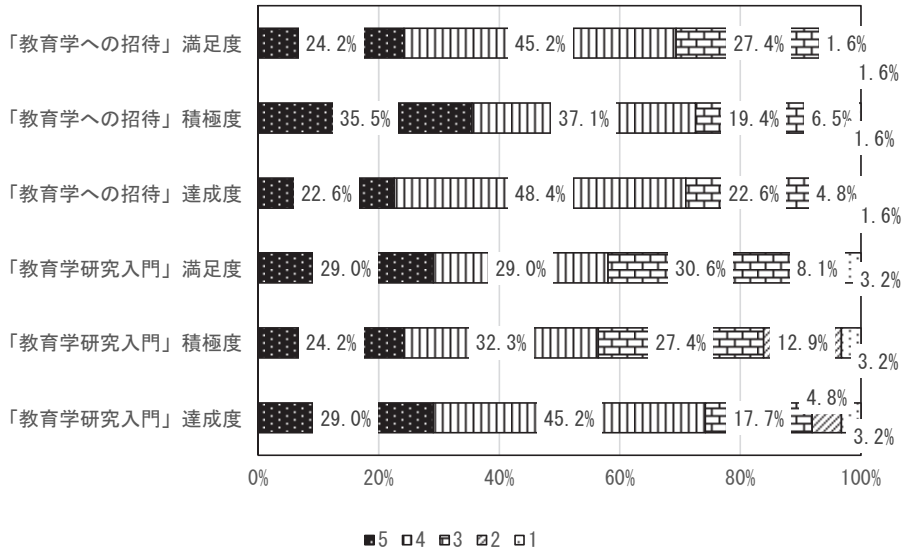

Figure3 「教育学への招待」「教育学研究入門」の評価

註 1) 選択肢「5」は，満足度で「大変満足」，積極度で「大変積極的」，達成度で「大いに達成できた」を示す。
註 2) 選択肢「1」は，満足度で「まったく満足していない」，積極度で「大変消極的」，達成度で「まったく達成できなかった」を示す。

Table4 「教育学への招待」「教育学研究入門」の評価項目間の相関係数

		Q2-1	Q2-2	Q2-3	Q3-1	Q3-2
Q2-1	「教育学への招待」満足度	1.00				
Q2-2	「教育学への招待」積極度	.53 ***	1.00			
Q2-3	「教育学への招待」達成度	.50 ***	.62 ***	1.00		
Q3-1	「教育学研究入門」満足度	.50 ***	.54 ***	.42 ***	1.00	
Q3-2	「教育学研究入門」積極度	.41 ***	.70 ***	.42 ***	.80 ***	1.00
Q3-3	「教育学研究入門」達成度	.32 *	.54 ***	.63 ***	.56 ***	.61 ***

* $p<.05$ *** $p<.001$

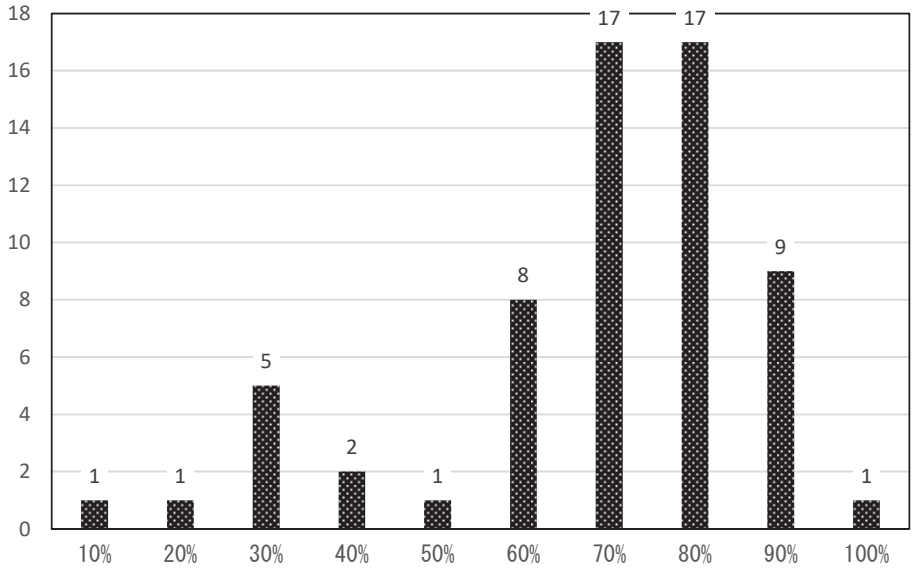

Figure4 対面授業の割合

Table5 対面授業割合と授業形式の好み

対面授業割合＼	オンライン好み	好みに差はない	対面好み
0%～30%	1	3	3
40%～60%	5	4	2
70%～100%	7	11	26

Q7 では，新型コロナウイルス感染症の拡大下における学生生活について，自由記述での回答を収集した。「特になし」と入力したものを除き，15 名から記入があった。全体として，対面授業やサークルなどで「充実した学生生活が送れている」「ストレスなく生活できている」といった回答が多く（11 名），「ボランティアなどに行きかったがコロナで機会がなかった」「大学祭が縮小されていた」「入国が遅れた」（留学生の回答）「なれない環境に悪戦苦闘した思い出しかない」などネガティヴな言及は 4 名にとどまった。また，コロナ収束後も含めて，オンライン授業も含めた多様な授業形態での受講を希望する記述が 5 名いた。

Q8 の自由記述では，「特になし」などの記述を除くと 2 名の入力があった。1 名からは学部内の友人が多くできたのは教育学への招待の成果であるとの記述，ならびに，講義の事後配信についての希望が記されており，もう 1 名からは，2 セメスターから学業意欲が低下してしまい，学業成績が振るわなかったことの述懐と，その一因として興味を持てる専門科目が少なかったことが述べられていた。

【まとめ】

コース選びの経緯については，全体としていろいろと考えたうえで決定したと答えた学生が多く，コース選びに資するために整えられた「教育学への招待」「教育学研究入門」の満足度や達成度もおおむね6割程度以上がポジティヴに回答していることから，新たな学部専門科目の2つがコース選びに一定の効果を持ちえたのではないかと考えられるが，2セメスターの「教育学研究入門」で，満足度，積極度が低下したことについては，今後検討を進める必要があろう。この点，特に「教育学研究入門」は教員の研究紹介という側面が強く，学生の積極的な参加を求める「教育学への招待」に比して，積極度も低く，満足度も低下した可能性が考えられる。一方で，両科目の積極度の相関は高く，教育学への招待の初期からの授業参加への仕掛けづくりが求められるのかもしれない。その点においては，初年度より，学生のグループワークの補助としてTAやBTAを起用していたが十全に生かすことができていなかった点も反省として挙げられるであろう。

さらに，受講したい授業や学びたい専門分野を決める自信が比較的に高いものの，卒業研究のテーマや指導を希望する先生などの決定はまだ不透明なところも多く，ポジティヴな感情と同様にネガティヴな感情も抱えていることがうかがえた。これらは，1年次のため致し方ない面もあるが，WG報告でも指摘されていた通り，指導教員決定などについては，2年次以降のオリエンテーションをはじめ，コースごとの説明会や，さまざまな学部授業を通して，具体的な方向性をイメージできるよう情報提供を進めていくことが求められよう。現時点で検討している卒業後の進路については，民間企業に続き，東北大学の大学院進学が27名と民間企業就職に次ぎ高さを示しており，近年の内部進学者の少なさを鑑みると意外な結果であった。これは，R3年以前の入学生でも1年次の段階では同様であったのか，あるいは，今年度の教育学への招待などで，東北大学が大学院大学であり研究者をはじめとした高度な教育に関する専門職を養成する機関であることを強調してきた結果であるのかはわからないが，今後の動向を見据えつつ，どの時点で「大学院進学」が選択肢から外れるのか，あるいは維持されるのかなども追跡的に検討を進める必要があろう。

また，コロナ禍における学生生活としては，高校時代に比べて制約が少なく，2021年度に比べて対面で受講する授業が大幅に増え，実際に対面授業の割合もほとんどが7割以上であると回答しており，全体的には充実した生活を送っているという回答が多かった。ただ，ボランティアへの参加機会がないことや，オンライン授業での履修も外的な事由によって行われている側面も指摘され，新型コロナウイルスによる影響が全く消失したわけではないことも指摘できる。引き続き感染予防を徹底したうえでの諸活動である点も留意する必要があろう。

いずれにせよ，新たなカリキュラムによる新入生の学びはまだ1年目を終えたところで

ある。本報告において指摘されたいくつかの事項を今後の教育ならびに学生指導に活用しつつ，追跡的，継続的に検討を進めていく必要がある。

【謝辞】

令和 3 年度の学部カリキュラム改革ワーキング･グループのメンバー, ならびに令和 3, 4 年度の教務委員会委員，教務係のみなさまに感謝申し上げます。

【文献】

学部カリキュラム改革ワーキング・グループ （2021）. 学部カリキュラム改革ワーキング･グループ報告. 東北大学教育学部令和 3 年 11 月 17 日学部教授会資料.（未刊行）

小嶋秀樹・神谷哲司・安保英勇・深谷優子・熊谷龍一・後藤武俊 （2022） オンラインによる大学教育に関する調査のデータ解析. 東北大学大学院教育学研究科先端教育研究実践センター年報, 22, 1-5.

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人. （2000）. 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71（3）, 241-246.

若松養亮. （2001）. 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて 教員養成学部の学生を対象に. 教育心理学研究, 49（2）, 209-218.